

『いはでしのぶ』 典拠攷一韻文編— (巻二)

横 溝 博

〔凡例〕

- 一 本稿は『いはでしのぶ』(推定全八巻)に確認できる引歌・引詩及び詩歌に典拠を有すとおぼしき表現を集成するために、本歌乃至は関係する参考詩歌を、物語の進行順に指摘したものである。
- 一 『いはでしのぶ』本文は、小木喬著『いはでしのぶ物語 本文と研究』(笠間書院、1977年。以下『本文と研究』と略す)を参照し、該当ページ数を付した。本文は影印本等に拠り、底本のママとするが、適宜濁点を付し校異を付すなどした。また他本による本文の補入は()で示した。引歌の箇所には適宜、下線を付した。
- 一 和歌の引用は、角川書店『新編国歌大観』に拠り、番号も同書に従うが、紙幅の都合上、詞書等適宜省略し、作者名表記も簡略化している。また表記も変えたところがある。
- 一 上記以外の作品については、通行のテキストを用いることとし、出典表記を略したことがある。
- 一 和歌の掲出は勅撰集を第一としたが、他出のある場合はこれも適宜示した。
- 一 ▼は確実な典拠と目されるもの、▽は典拠とは見えずには躊躇されるが参考歌として無視しがたいものである。適宜※印を付して簡略なコメントを付した。また〔参考〕として表現が類似する歌や散文の例などを掲げた。
- 一 『いはでしのぶ』の典拠に関わる先行研究として、前掲小木喬著書のほか、三角洋一氏による『鎌倉時代物語集成 別巻』(市古貞次・三角洋一編、笠間書院、2001年。以下『別巻』と略す)があり、それぞれで指摘のあるものについて【小】【三】として示した。無記号は稿者があらたに加えた指摘である。但し【小】【三】いずれも稿者が吟味した上、▼もしくは▽の記号を付した。
- 一 作中歌については、本稿の姉妹編として『『いはでしのぶ』典拠攷(作中歌編)』を予定している。
- 一 本稿に関わる拙論に、『『いはでしのぶ』文体論序説—中世の歌ことば表現をめぐる—』(『平安朝文学研究』復刊第12号、2003年12月)がある。また近年の解題として足立蘭子『いはでしのぶ』(『中世王朝物語・御伽草子事典』勉誠出版、2004年所収)があり参照されたい。
- 一 本稿は2005年に成稿し早稲田大学に博士課程学位論文の一部として提出した原データに基づく。遺漏もあり付け加えるべき点もあるかと思うが、すべては「考察編(成立論)」の稿を起す時に採用することとし、いまは大方の批正を俟つこととする。
- 一 本稿の発表は永井和子氏(学習院女子大学名誉教授)及び笠間書院の慫慂に拠るところが大きい。記して謝意を表する次第である。

巻二

1. もらぬいはやだにぬるるは袖のならひなるを (271)

▼草の庵なに露けしと思ひけんもらぬ岩屋も袖はぬれけり 【小】【三】

(金葉・雑上・533・大峰の生の岩屋にてよめる・僧正行尊)

※笙の岩屋の聖こと行尊大僧正の詠。『撰集抄』『西行物語』にも見える。『行尊大僧正集』

120は初句「ささのいほ」。

2. かごとにもむすぶ草の葉も (271)

▽いつとなくおつる涙のたまのをは露のかごとをむすぶばかりぞ

(明日香井集〈雅経〉・玉帯・727)

▽わけゆかむ草葉の露をかごとにてな濡れ衣をかけんとや思ふ【小】

(源氏物語・夕霧巻・531・落葉宮)

▽ほのかにも軒端の萩を結ばずは露のかごとを何にかけまし

(源氏物語・夕顔巻・39・源氏)

3. あさちがすゑとうらがれわたりつつ (271)

▼物をのみ思ひしほどにはかなくて浅茅が末に世はなりにけり【小】【三】

(後拾遺・雑三・1007・世中つねなく侍りける頃よめる・和泉式部)(和泉式部集・639)

※「浅茅が末」は他に『新古今』377・1286・1681に出。

※後出・巻三「思ひしほどにはかなくてなど」(474頁)と見える。

▽けふみれば岩田の小野の真葛原うらがれわたる秋風ぞ吹く

(続後拾遺・秋下・379・後京極撰政家歌合に野風・家隆)(壬二集・2424)

※『新後拾遺』438はこれの本歌取り。この二首のみ「うらがれわたる」。『拾玉集』1783にも「うらがれわたる」と見える。次の歌が基層にあるか。

▽うらがる浅茅が原の刈萱の乱れて物を思ふころかな

(新古今・秋上・345・題しらず・坂上是則)(是則集・30「しもがれの浅茅がもとの」)

▽色かはる露をば袖にをきまよひうら枯れてゆく野辺の秋かな

(新古今・秋下・516・〈千五百番歌合に〉・俊成女)

4. このはにうづもれたるしばのいほりの時雨るころぞ (271)

▽とふ人もあらしふきそふ秋はきて木の葉にうづむ宿の道芝

▽色かはる露をば袖にをきまよひうら枯れてゆく野辺の秋かな

(新古今・秋下・515, 516・千五百番歌合に・俊成女)

※俊成女 515 番歌は、『源氏物語』帯木巻「うち払ふ袖も露けき常夏に嵐吹きそふ秋も来にけり」を本歌とする。また紅葉賀巻に、「もの見知るまじき下人などの、木のもと、岩隠れ、山の木の葉にうづもれたるさへ、少しものの心知るは涙落としけり」とあるのも関わるか。

5. このよをばなきになしてうきもうれしうたのもしき心ちし侍れど (273)

▽うらみずはいかでか人に問はれましうきもうれしきものにぞありける

(後拾遺・雑二・953・律師朝範)

▽世のなかのうきはいまこそうれしけれおもひしらずはいとはましやは【三】

(千載・雑中・1146・賀茂社歌合に述懐歌とてよめる・寂蓮)

6. きみこそきたのふちなみ春にあひ給とも (273)

▼春日山みやこの南しかぞおもふ北の藤なみ春にあへとは【小】

(新古今・賀歌・746・家に歌合し侍りけるに春の祝のこころをよみ侍りける・良経)

▽ふだらくの南のきしにだうたていまぞさかえむ北の藤なみ【三】

(新古今・神祇・1854・〈左注〉この歌は興福寺の南円堂つくりはじめ侍りける時かすがの榎のもとの明神よみたまへりけるとなむ)

7. みなかみいはし水のながれおもひすて給はじと (273)

▼いはし水その水上をおもふにもながれのすゑは久しかるべし

(正治後度百首・雑・神祇・252)

8. 山ぢのをくのこの葉がくれしもいかならんと (276)

※「この葉がくれ」を歌句とするは八代集中、次の二首のみ。『別巻』はうち一首を参考として挙げる。

▽かずならぬわが身山べの郭公このはがくれのこゑはきこゆや【三】

(後撰・夏・179・さ月ばかりに物いふ女につかはしける・よみ人しらず)

▽いまよりは木のはがくれもなけれども時雨に残るむら雲の月

(新古今・冬・597・千五百番歌合に・源具親)

9. このふしみのさとに(は)すみ給なりけり (279)

▽夢かよふ道さへたえぬ呉竹のふしみの里の雪のしたをれ

(新古今・冬・673・同じ家にて所名を探りて冬歌よませ侍けるに伏見里雪を・有家)

※同じ家…良経邸の歌会。

しらず) (拾遺・恋五・996・よみ人しらず)

※『源氏物語』常夏巻の近江の君の女御に宛てた文の中に、「いとふにはゆるにや」と引く。この部分、『源氏釈』以下、古註では次の未詳歌を引歌として挙げる。

▽にくさのみ益田の池のねぬなはいとふにはゆるものにぞありける

※また『石清水物語』にも、「〈伊予ハ〉みづからが心には、うきにたへたる命の猶消えやらで、物をおもひなげかんことの口おしさは、げに、いとふにはゆるならひ、と心うく覚えながら」(『鎌倉時代物語集成』93 頁)とある。

16. いかにとかやいひをきたるこはたのさとのかよひじも (302)

※小木喬は、直後の「さばかりにはあらぬにや」との関わりから、次の歌を引くかとする。

▽山科の木幡の里に馬はあれどちよりぞゆく君を思へば【小】【三】

(拾遺・1243・題しらず・人麻呂)(万葉・巻十一・2425) 他異伝あり
しかし、「言ひおきたる」とあるから、典拠があるのであろう。『源氏物語』に、
「木幡の山に馬はいかがはべるべき。いとどもの聞こえや、障りどころなからむ」

(源氏物語・総角巻)

とある。これも古註以来、上の人麻呂歌に拠るとされているところだが(これについては植田恭代「木幡の山に馬はいかがはべるべき——『源氏物語』と伝承歌——」〈『和歌文学大系』月報 21, 2004 年 2 月〉を参照)、しかし、「言ひおきたる」という表現にそぐわない。すると「いかにと」「木幡」の関係では、次の歌が浮上する(家隆歌は行家歌の本歌取か)。

▽いかにせん人の心は木幡河月日ふれどもわたるせもなし

(壬二集・為家卿家百首・恋廿五・1305)

▽五月雨にいかにかもせんこはた河かちより人のわたる瀬もなし

(夫木抄・二十四・雑六・11165・五月雨を石間・行家)

植田恭代氏は「『源氏物語』の「木幡の山」は、伝承歌の磁力の広がり根に根ざす。それは、鎌倉期の成立といわれる『いはでしのぶ』の「木幡(ママ)の通ひ路も」とは、同一視しがたいのである」と言う。『いはでしのぶ』では木幡のイメージが定型化しているというのであろう。それを認めるとして、上では行家あるいは家隆の歌を踏まえつつ、「木幡河」ではなく、「木幡の里の通ひ路」という定型化したイメージをもつ表現をとったのであろうか。

17. まさりてこひしき御おもかげにあしわけをぶねはいとどやすらひがちなれど
(306)

▼湊入りの芦分小舟さはり多みわが思ふ人に逢はぬころかな 【小】 【三】

(拾遺・恋四・853・題しらず・人麿)

18. いなばもそよとだにことはりなきたぐひよりもけなる御身のきはなればにや一品
の宮はけしからぬまでおほどかにのみもてなさせ給つゝ (306)

▼ひとりしてものを思へば秋の田のいなばのそよといふ人のなき 【小】 【三】

(古今・恋二・584・題しらず・躬恒)

※「いなばもそよ」では、次の歌が一致する。典拠として適当か。

▽秋風のいなばもそよと吹くなへにほにいでて人ぞ恋しかりける

(玉葉・恋四・1645・貫之) (貫之集・581)

19. おちこち人のながめのすゑも (309)

※「ながめのすゑ」は『新編国歌大観 CD-ROM』では 29 例が検索でき、正治後度百首 (正治二年〈1200〉) から見える。

▽中中にながめのすゑははれにけりとほ山のはのかすむ明ぼの

(正治後度百首・304・霞・源具親)

▽浪まよりほのぼのかすむ光かなながめのすゑやあまのいさり火

(正治後度百首・876・かいへん・宮内卿)

※巻四・522 頁に、関白の歌として、

▽おもひやるながめのすゑにきりたちておぼつかなさは秋ぞまされる
と見える。「おもひやる～」と続くのは、次の歌。

▽おもひやるながめのすゑもかきくらしそらさへとづる五月雨のころ

(実材母集・夏・321)

▽思ひやるそなたのそらははるかにてながめのすゑのかぎりだになし

(秋夢集 (後嵯峨院大納言典侍〈為子〉)・39)

なお、実材母には他にも一首、次のような歌がある。

▽はるばるとながめのすゑもかすみつつ雲にきえゆくはるのかりがね (実材母集・489)

※その他では『伏見院御集』に多く、6 首を数える〔45 (霞), 225 (花), 680 (夏),

704 (霞), 773 (遠樹), 2199 (春野)]。そのほとんどが, 「かすみ」「かすむ」という語とともに詠まれる。

※「おちこち人」については, 小木は次の歌の上句によったものかと注す。

むかしおなじ所に宮づかへし侍りける女の, をとこにつきて人のくにおちゐたりけるをききつけて, 心ありける人なれば, いひつかはしける
▽をちこちの人めまれなる山里に家ゐせんとは思ひきや君【小】【三】
(後撰・雑二・1173・よみ人しらず)(大和物語・第五七段・「思ひかけきや」)

20. うづもれはてぬらん(かの)しのやののきまづをもひやられ給へば (309)

※次の贈答歌による。

雪朝, 基俊許へ申しつかはしける 瞻西上人
▼つねよりもしの屋ののきぞうづもるけふは都にはつ雪やふる【小】【三】
返し
▼ふる雪にまことにしの屋いかならんけふは都に跡だにもなし【小】
(新古今・冬・658, 659)(基俊集・5251)

21. のきちかきくれたけのをのれひとりとしたをれたる程 (311)

▽植ゑおきしあるじはなくて菊の花おのれひとりぞ露けかりける
(後拾遺・秋下・347・恵慶法師)(恵慶法師集・100)

※[参考]「かれ見たまへ。おのれ独りも涼しげなるかな」(源氏物語・若菜下巻)

※他に典拠あるか。『源氏物語』諸注も特に典拠を記さない。小木は呉竹を擬人的に扱っているところ, 末摘花巻に, 「橘の木のうづもれたる, 御隨身召して払はせたまふ。うらやみ顔に, 松の木のおのれ起きかへりて, さとこほる雪も」とあるのを思わせると注している。

22. 女君(の)いとゞせきあへずおもひむせびたまへるも (314)

▽見し人は影もとまらぬ水の上に落ちそふ涙いとどせきあへず
(源氏物語・手習巻・793・薫)

※[参考]「老人(=弁の尼)はいとどさらにせきあへず」(源氏物語・宿木巻)

23. げにまたあらぬなみだならず心ぐるしうあはれなるも (314)

※「あらぬなみだ」は、『とはずがたり』巻三、『大和物語』二九段にも見える。

▽つらしとて別れしままの面影をあらぬ涙に又宿しつる

(とはずがたり・巻三・51・二条)

24. この世とのみやは見え侍る (321)

▼神もなほもとの心をかへり見よこの世とのみは思はざらなむ【三】

(狭衣物語〈大系〉・巻四・147・狭衣)

25. 時々はいづちにけるぞともたづね給へかし (322)

▼思はむとたのめし人は有と聞く言ひし事の葉いづちにけん

(後撰・恋二・665・人の心変りにければ・右近)(大和物語・八一段)

26. ともにくれはてぬるとしさへうきも (328)

※『別巻』は参考として次の歌を挙げる。

▽年くれてうかりし日をばへだつれど有りしにまさる吾が涙かな【三】

(風葉・哀傷・651・女の思ひにて侍りけるにとしのくれはてぬるもおどろかれて・夢が
たりの前関白)

27. いかなればくれてもとしのかへるらんわかればいとゞ月日へだてゝ

うらやましうも侍かなとて (328)

▼いとどしくすぎゆく方のこひしきにうら山しくも帰る浪かな【三】

(後撰・羈旅・1352・あづまへまかりけるにすぎぬる方こひしくおぼえけるほどに河を
わたりけるになみのたちけるを見て・業平)(伊勢物語・七段)

28. あらたまる^(甲乙前西む)春につけてもすみぞめの袖にかすみの色やそふらん

はれぬなげきはをとるまじうこそ (328)

※三条西家本「くれぬながめ」とあるが誤写にともなう意改であろう。

▼山たかみおもひかくればはるがすみはれぬなげきももえまさるかな

(九条右大臣集〈師輔〉・32)

※あるいは『在明の別』巻二に、「はれぬながめそひぬる心ちし給」(19オ)とあるの
と関係あるか。『別巻』は次の歌を挙げる。

▽水まさるをちの里人いかならむ晴れぬながめにかきくらすこ 【三】

(源氏物語・浮舟巻・746・薫)

29. あれまくをしきふしみのさと (335)

▼いざここにわが世はへなむ菅原や伏見の里のあれまくもをし 【小】

(古今・雑下・981・題しらず・よみ人しらず)

30. まことに庭もまがきも草ふかく (337)

仁和のみかどみこにおはしましける時、ふるのたき御覽ぜむとておはしましける
みちに遍昭がははの家にやどりたまへりける時に、庭を秋ののにつくりておほむ
物がたりのついでによみてたてまつりける

▼さとはあれて人はふりにしやどなれや庭もまがきも秋ののらなる 【三】

(古今・秋上・248〈巻末歌〉・僧正遍昭)

31. 人めつつみにせかれつつ (340)

▼なみだ河人めづつみにせかれつつきみにさへこそもらしかねつれ

(続後撰・恋一・684・刑部卿頼輔家歌合に・前参議教長)(教長集〈貧道集〉・650)

※頼輔は教長の異母弟。「刑部卿頼輔家歌合」は嘉応元年(1169)。

※類歌は他に『重家集』158。『別巻』は次の歌を挙げる。

▽たきつせのはやき心をなにしかも人めづつみのせきとどむらむ 【三】

(古今・恋三・660・題しらず・よみ人しらず)

32. うちとけてむすびもはてぬゆめにてのみすぎゆくも (340)

▽やまの井のむすびもはてぬちぎりかなあかぬしづくにかつきゆるあわ

(秋篠月清集・1435)

▽神かけていのりし道のむもれ水むすびもはてぬかげやたえなん (拾遺愚草・2722)

▽あやめ草一夜ばかりの枕だにむすびもはてぬ夢のみじかさ

(続拾遺・夏・172・昌蒲をよみ侍りける・前中納言雅具)